

説教抄

十 私達の父なる神と主イエス・キリストから恵みと平安とが、皆様お一人お一人の上にありますように。アーメン

どこにでも、人の話を良く聞かない人はいるものです。話の真意を理解せずに言葉尻だけを捉えて質問し、本筋から外れていってしまうタイプです。ヨハネ福音書はそういう意味で、イエスの言葉を誤解することを通して、人間の問いを越えた答えを主イエスから導き出している特徴を持っています。

ユダが主イエスに問うた問いもその一つです。22節「主よ、わたしたちには御自分を現そうとなさるのに、世にはそうなさらないのは、なぜでしょうか」。確かにこの問いは文脈からはずれた問いではありますが、しかしとても共感できる思いではないでしょうか。

そしてこの問いは、別な問いをも惹き起こします。「それでは、なぜこの私に主が現れて下さったのだろうか」という問いです。皆さん自身、周囲を見渡してみても不思議ではないでしょうか？ 親族皆がクリスチャンというならいざ知らず、周囲の中で自分だけがクリスチャンという場合、なぜ自分が神さまと出会い、信仰を持つことが出来たのか。

逆に、クリスチャンホームで育っても信仰を持たずに終わる方もいます。また、自分を信仰に導いてくれた先輩信者が、いつの間にか信仰を捨ててしまっている…。信仰を持つ、そして持ち続けるということは、私たちの思いを越えた、正に神さまの不思議な導きとしか言えないと思うのです。

先ほど「主、我を愛す」を歌いましたが、信仰においては「我、主を愛す」に先だって、主が私を愛して下さった。その愛をしっかりと受けとめることが信仰の「始めであり、終わり」であると言って良いと思うのです。ですから、私たちが命じられている愛とは、主イエスが私たちが愛して下さっているその愛を一杯に受けて、受けることから自ずと出てくる愛です。何も私たちの内側から引っ張りだしてくるものではないのです。私たちは自分の中の空っぽの井戸から水を無理に汲まなくて良い。そうではなく、命の泉である主から命の水を頂くのです。それを携えていくのです。

何度も語ってきましたように、私たちが愛せないのは、私たちが主イエスの愛を良く知らないからです。「主、我を愛す」が分かっていないからです。だからもし、私たちが自らの愛の足りなさに嘆く時、私の愛する力を増し加えたまえと祈るのではないのです。むしろ、主イエスの愛が見えるように、感じられるように、この目と耳を開いて下さいと祈るべきなのです。

言い換えれば、自分の思いで一杯になっている心の中を空っぽにして、主のみ言葉を待つ。そこに主は静かにその愛を注ぎ込んで下さる。その時、私たちの信仰に血が通い、動き出さずにはいられなくなるからです。

ところで、27節で主イエスは次のように命じておられます。「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな」。

キリストが与える平和、それは世が与える平和とは異なる。そう語られるのです。私たちは、今日、特にこの言葉に目が開かれねばなりません。



私たちが教会に求めている平和や平安、その多くはこの世のものではないでしょうか。しかし、キリストはそのようなものを私たちに残して下さったのではない。

ヨハネは福音書の中で三度、この平和という言葉を用いています。最初は今日の箇所です。そして16章と20章です。20章では復活の主が弟子たちの真ん中に現れ、釘跡の残る手とやりで突かれた脇腹を見せながら「あなたがたに平和があるように」そう告げられたのです。正にこの十字架の死から蘇られた方が与える平安。それはどのような苦しみや悲しみ、死さえも越えて与えられる平安なのです。

ルターは語ります。「この聖句から知られることは、聖霊は、苦しみと悩みの中に沈んでいる人々にのみ与えられるということである。……。苦しみが人から切り離される時、世はこれを平和と呼びます。たとえば貧乏である場合、もし貧乏がなくなれば、平和と富の中に生活できるのだがと、なんとかして貧乏から逃れる方法について思い巡らします。また危篤に陥った時、死から逃れることさえ出来れば、いのちと平和を持つことが出来ると考えます。しかし、これはキリストの与える平和ではありません。むしろ、主は、悪が人の上に乗せられ、ずっと圧迫し悩ませ続けるままにして、取り去られません。ところが他の計画を持っておられます。すなわち、その人自身を変えるのであって、人から悪を引き離すのではなく、悪から人を引き離すのです。このように、あなたがたは苦しみの中に置かれていますが、主はその中であなたがたの方向を変え、勇気を与えて、ばら園の中に座っているかのごとく思わせます。このようにして、死のさなかにも命があり、逆境の最中にも平和と喜びがあります」。そのようにルターは語るのです。

ルターの紋章を見て下さい。「薔薇の上に置かれたキリスト者の心臓は、十字架の真下にあるときに脈打つ」というのはそのことを表しています。

前半でお話した「なぜこの私に主が現れて下さったのだろうか?」という問いに対して、いよいよ最後に弟子たちそして私たちに告げられるのです。16章33節「これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」

十字架の死から復活し給うたキリストのみが語りうる勝利宣言です。この平安に与り、この平安に生き、そしてこの平安を世に証しするために私たちに主が現れて下さったのです。主イエスが御傷（スティグマ）を示して「シャローム」と語りかけて下さったように、私たちも自分が受けた傷や苦しみ、悲しみや涙をスティグマとして身に帯び、私の隣人へと私が主に頂いたシャロームを手渡すために遣わされていくということなのです。

この場所に集められた私たちを主は再び御力をもってお遣わしになります。

31節「さあ、立て。ここから出かけよう」。

十 望みの神が、信仰から来るあらゆる喜びと平安とをあなたがたに満らし、
聖霊の力によって、あなたがたを望みにあふれさせて下さるように。アーメン

